



# マンドリン音楽資料館 第4回コンサート

武井守成と欧州の20世紀マンドリン模様

**BIBLIOTECA MUSICALE MANDOLINO**

## **QUARTO CONCERTO**

**M<sup>o</sup>. MORISHIGE TAKEI ET**

**LA MUSICA PER ESTUDIANTINA DEL PRIMO NOVECENTO IN EUROPA**

2023.10.22 (日) 於:旧東京音楽学校奏楽堂

*Domenica, 22 ottobre 2023 18:30*

主催：特定非営利活動法人プレクトラム音楽研究会  
後援：一般社団法人日本マンドリン連盟 絃楽器のイグチ



\*\*\* 第1部 \*\*\*

プレクトラム・ソサエティ

---

「微風」 作品108 (1947) “Breeze”	武井 守成 Morishige Takei
マドリガル「遙かな幻影」 (1922) “Visioni lontane” Madrigale	マリオ・バッチ Mario Bacci
子守歌「月夜」 (1925) “Notte Lunare” Berceuse	イジドーロ・アンジェロ・フィリオリーニ Isidoro Angero Figliolini
ワルツ「愛しい人!」 (1914) “Mon Amour!” Petit Valse	ロベルト・クレパルディ Roberto Crepaldi
「古風なセレナータ」 (1905) “Vecchia Serenata”	アメデオ・アマデイ Amedeo Amadei
叙景的幻想曲「秋の夕暮れ」 (1906) Fantasia descrittiva “Tramont d’Autunno”, Op.99	ジュゼッペ・マネンテ Giuseppe Manente

\*\*\* 第2部 \*\*\*

浦和ギターマンドリンクラブ

---

ガヴォット「愛撫」 (1912) “Caresses” Gavotta	ジローラモ・カーリ Girolamo Cali
セレナータ「穏やかな夜」 (1925) “Notte Placida” Serenata	ジュゼッペ・アネッリ Giuseppe Anelli
組曲「くだものの舞曲」 作品111 (1948) Suite “Le Danza dei Frutti”	武井 守成 Morishige Takei
樂詩「あやつり」 作品12 (1927) ポール・ヴェルレーヌの詩に據れる オルケストラ・シンフォニカ「タケキ」會長 武井守成氏に捧ぐ “Fantoches”	鈴木 静一 Seiichi Suzuki
幻想曲「ハンガリアの旅」 (1965) “A Travers la Hongrie” Fantaisie	フランソワーズ・メニケッティ François Menichetti

## \*\*\* 第3部 \*\*\*

### コンソルテ

パソ・ドブレ「スペインの花」(1922) “Fleur d’Espagne” Paso Dobló	リカルド・カサド Ricardo Casado
「静寂」(1905), Op.137 “Quies”	ジョヴァンニ・ボルツォーニ ジョヴァンニ・フランチェスコ・ポーリ Giovanni Bolzoni/Giovanni Francesco Poli
序曲「芸術と労働」(1930) “Arte e Lavoro” Overture	イニャーチョ・ビテッリ Ignazio Bitelli
「神秘」(1931) “Mistica”	アルリーゴ・カッペルレッティ Arrigo Cappelletti
「スペイン幻想曲」(1906) “Fantasia Spagnola”	エッツィオ・レデギエリ Ezio Redeghieri
「ミシン」 作品72の4 (1947) 武井直子氏に贈る “Machine”	武井 守成 Morishige Takei

### ご挨拶

本日は第4回目のマンドリン音楽資料館演奏会にお越し頂きありがとうございます。今回の演奏会も昨年に続き由緒ある旧奏楽堂で開催することが出来ました。

昨年2月に特定非営利活動法人プレクトラム音楽研究会を新たに設立し、マンドリン音楽のさらなる発展を目指し活動を続けています。

マンドリン音楽資料館には膨大な楽譜や資料が集められていますが、取り組みのひとつとして、あまり知られていないマンドリンのためのオリジナル作品等の発掘をし、皆さまに紹介することがあります。

今回も今まであまり演奏される機会がなかった曲も取り上げましたので、ごゆっくりお聞き頂ければと思います。

特定非営利活動法人プレクトラム音楽研究会理事長 岸本哲郎

### 正会員募集と寄付のお願い

当法人ではマンドリン音楽資料館を運営し、マンドリン関連の楽譜、資料類の分類、整理、収蔵、公開を行なっています。一緒に活動頂ける方、運営に賛同して継続的にご支援いただける「正会員(個人・団体)」を募集しています。資料館を維持していく為には資料館の管理費、各種営繕費、水道光熱費等の維持費用の他、収納用品や各種機器の保守、レンタルサーバ利用などの事業活動費用が必要です。また当法人の活動に賛意をお示しくださる方からの寄付等ご支援を賜りますよう何卒よろしくお願いいたします。

詳しくは名札を付けたスタッフにお申しつけください。  
またホームページも是非ご覧ください。

会員登録のページは  
こちらからどうぞ



旧東京音楽学校奏楽堂での演奏会は昨年につき2回目となりました。場所や人員の都合で大きな編成のものは出来ませんが、今回は出演各団体が一曲ずつ武井さんの作品を取り上げます。

ここ上野の地は、実は武井さん（ご本人は先生と呼ばれる事を嫌って武井さんと呼ぶように、と指導されていたそうです）には少しご縁のある場所です。武井さんがオルケストラ・シンフォニカ・タケキ（O.S.T.）の前身であるシンフォニア・マンドリニ・オルケストラ(S.M.O.)を設立された1916年頃のお住まいはここ旧奏楽堂から歩いて十数分の湯島三組町（現在の湯島二～三丁目）にあり、演奏会も武井邸で開かれていました。

1923年の関東大震災で旧武井邸が焼失した後、1926年8月同地に武井邸の新築に併せて、専用の楽器庫兼合奏場として「正容楽堂」が建設されました。（父から「正」の字を取り、孔子の「礼記」にある『爾（なんじ）の容を正しくし、聴くに必ず恭』から「容」を採って命名された、とあります）第二次大戦で中野に移るまでの間、O.S.T.はこの合奏場で毎週練習を重ね、充実した陣容となっていました。

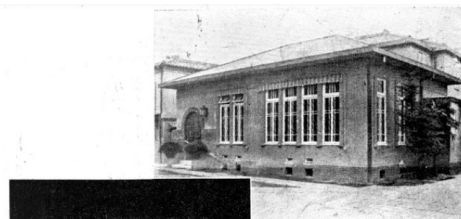
武井さんは戦争末期、中野の家が空襲によって被災し家財等を焼失されましたが、先の震災で焼失した第一次武井文庫に替わり、新たに収集された第二次武井文庫の多くと愛用のギターは、縁の下に設けられた六畳程の地下室に移されました。上部を鉄板で塞ぎ火気を防ぐ措置を講じた事でこれらの楽譜は奇跡的に空襲から護られ、1949年の超大型台風にも耐え抜きました。

そして杉田村雄さん、市毛利喜夫さん等の先達のお蔭で楽譜たちはほぼ散逸する事なく引き継がれ、現在原本は国立音楽大学図書館に、複写はJMUの委託を請け私どもの法人が運営するマンドリン音楽資料館に所蔵されています。

奇しくも武井さんがご一族で眠る大変立派な墓地もここから間近な霊園にあります。そこには武井さんについて多くを書き残して下さった、ご息女の足立直子さんもご夫君と共に眠っていらっしゃいます。

実は「正容楽堂」があった場所と武井さん達が眠る墓所、そしてここ旧東京音楽学校奏楽堂は偶然にも二等辺三角形のようなごくごく近い位置関係にあるのです。

去年今年と演奏する曲の中には「武井音楽文庫」が残してくれた作品たちが沢山含まれています。今私達が合奏を楽しんでいるマンドリン合奏はまさに武井さんや、それを受け継ぐかのように時代を駆けめぐった偉人たちが、次世代に繋いでくれた「ご縁」だと思っています。私達はその偉業に深く頭を垂れ、感謝の念を持ち続け、次世代に残せるよう活動していきたいと思っています。



O.S.T.練習場「正容楽堂」全景



武井氏の面影



## ◆武井守成略歴◆

武井守成は1890年鳥取市に生まれ、1949年東京に逝いた宮内省官吏、作曲家、指揮者。父は貴族院勅選議員で枢密顧問官の男爵である武井守正。1903年に東京高等師範学校附属小学校、1909年に東京高等師範学校附属中学校を卒業。1913年、東京外国語学校イタリア語科を首席で卒業。在学中約6カ月イタリアに学術研究の為留学した。

往時より独学でギターと和声を学び、その後比留間賢八に師事、1916年田中常彦らと共にマンドリンとギター合奏を始め、会名を「シンフォニア・マンドリニ・オルケストラ」として、機関紙「マンドリンとギター」を発刊。

1917年に宮内省に式部官として任ぜられ、1921年には楽部長を兼任。1923年、「第一回全国マンドリン合奏団コンコルソ」を実施。関東大震災後、会名を「オルケストラ・シンフォニカ・タケキ」、機関紙を「マンドリン・ギター研究」と改めた。1924年には作曲コンコルソ、1927年には合奏曲コンコルソを開催し、今日の斯界繁栄の基礎を築いた。

1925年欧州の四大文庫を譲受け、今に残る武井音楽文庫の基礎となる。1926年男爵位を襲爵。その後、式部職儀式課長を経て、1941年より式部次長。1945年7月には式部長官に就任し、1947年3月まで務めた。没後特旨を持って従二位に叙せられた。

著書に「マンドリン・ギター及其オーケストラ(1924)」、「マンドリン・ギター片影(1925)」がある。



## 「微風」作品 108 (1947)

武井 守成

### 作曲者記

「戦時中われわれの合奏も休止の止むなきに至り、従って作者は専らギター独奏曲のみを書いた。昭和22年5月漸くアンサンブルも復活し、先づ放送が始まった。作者の鬱積していたアンサンブルに対する情熱はこの曲にあふれ出たといえよう。昭和22年8月の作。放送に演奏された事はあるが演奏会としては初演である。」1950年6月15日 オルケストラ・シンフォニカ・タケイ 第50回 故武井会長追悼演奏会

## マドリガル「遙かな幻影」“Visionilontane” Madrigale (1922)

Mario Bacci

作者は1873年フィレンツェに生まれた作曲家、マンドリン・ギター奏者、評論家、音楽教師。同地でサルヴァトーレ・フィッチーニとヴィンチェンツォ・ビルリに和声と対位法を学び、ガイド・モナコ・マンドリン合奏団の指揮者として活躍。マンドリン合奏の為に非常に多くの作品を残した作曲家として戦前より知られている。

本邦においても早くから演奏されており、代表作にはフェラーラのマルゲリータ合奏団に贈った序曲「マリネッタ」“Marinella”、フィレンツェのムニエル合奏団に贈った序曲「ヴェルシリア」“Versilia”があり、いずれもA.Vizzari社から手写譜として発売され、共益商社などを通じて日本にもたらされた。マンドリン合奏作品は1910年代から1930年代にかけてイタリアとフランスの代表的な音楽誌に満遍なく提供されている。後年はローマに移り、文化連盟会長の要職も務めた他、パリやニューヨーク等に楽旅し、様々な音楽誌に多数の寄稿を残した。作品は単純な構成でやや通俗的なものが多いが、特にイタリア、フランス双方で多くの作品が出版されたという事から考えると、双方の愛好家に受け入れられる作品が書けるというセンスを持ち合わせた人だった事に気がつく。(中野二郎氏の講話の中にはイタリアはフランスの曲は演奏しない、フランスはイタリアの曲は演奏しないというお話がある)

本作はマドリガルと記されている通り、牧歌的田園的な叙情詩で長閑な景色が描き出されている。

## 子守歌「月夜」“Notte Lunare” Berceuse (1925)

Isidoro Angero Figliolini

作者は、1878年にピエモンテ州ヴェルチェッリに生まれ、1955年、同地に逝いた作曲家・ヴァイオリニスト。1923年から1935年まで、ヴェルチェッリのヴィオッティ音楽院で、指揮と弦楽器の教授を務めた。ヴァイオリン・チェロ・ピアノの為の“Verbe et Voce”は1951年同音楽院の国際コンクールに入賞している。早くからマンドリン音楽にも関わっており、特に1907年に“II Concerto”誌で行われたカルロ・ムニエルを中心とした論戦に若干29歳にして関わっていたことは有名である。彼のマンドリン音楽への貢献は少なからざるもので、間奏曲「古城の物語」を始めとした合奏曲、独奏曲を発表、また門下生を中心とした合奏団“Complesso a plettro”Figliolini”を組織しヴェルチェッリやピエラを中心に演奏活動を行った他、ハープも演奏し、アコーディオンも教えていたらしい。作品の多くはポローニヤの“II Concerto”誌とトリノの“II Mandolino”誌で発表され、多くの作曲コンクールで受賞している。

フィリオーニは一男一女をもうけ、長男エルマンノは若い頃からトリノやミラノで美術を学び、モディリアーニやマティスの研究と共に自身の作品を多数発表し、画家として名をなした後1985年に亡くなったが、石村隆行氏は在伊中に健在であった長女のラウラを訪ねて、作品を贈られている。なおフィリオーニが終生を過ごしたヴェルチェッリの街には故人の遺徳を長く偲ぶ為、フィリオーニの名を冠した通りが設けられている。

本作は長女のラウラに献呈された子守歌で、浪漫的な和声に彩られた小品で大変愛らしい作品である。

## ワルツ「愛しい人!」“Mon Amour!” Petit Valse(1914)

Roberto Crepaldi

作者は、1878年パドヴァ近郊のコレッツォーラに生まれ、1949年ミラノに逝いた作曲家。20世紀初頭にミラノの合奏団を率いていた事以外の経歴が判明していない。作品は“II Concerto”と“II Mandolino”の二誌で8曲ほどが確認されている。

本作は1914年に開催された“II Concerto”誌の作曲コンクールで銀牌を得た作品で、よく似たタイトルのワルツ「貴女だけを!(Te sola!)」がある。

## 「古風なセレナータ」“Vecchia Serenata” (1905)

Amedeo Amadei

作者は1866年12月イタリア、ロレートに生まれ、1935年6月トリノに逝いた作曲家、オルガニスト、指揮者。父ロベルトと祖父ピエトロは共にロレート音楽院の院長で、アメデオも父ロベルトに学び、5歳で作曲を始め、7歳で最初の作品を出版している。ポローニアのアカデミア・フィラルモニカでピアノ、オルガン、合唱指揮を学んだ後、ピアニスト(F.ショパンを好んだという)、オルガニストや合唱指揮者として活躍した。妹のセシリアはピアニストで、義弟のQ.ラッツァリーニはオペラ・ムジカーレ・ローレターナのオルガニスト。

1889年歩兵第73連隊軍楽隊長に就任、以降各地の軍楽隊長を歴任した。退役後はトリノに移住し指揮者指導者として楽壇に大きな貢献を成した。作品の総数は498曲に及び、特に管弦楽の為の6つの組曲は代表作としてしばしば演奏された。E.ジュディチが監督を務めるベルガモのマンドリンクラブの名誉会長に就任し、作曲コンクールの審査員を各地で務めた他、斯界刊行誌“Vita Mandolinistica”、“II Piano”に於いて主幹を務める等幅広く活躍した。P.マスカーニは親友であり、夏になるとしばしばロレートを訪れたという。後年トリノに移り住んでもからも旺盛な作曲意欲を持ち多数の作品を世に出した。

本作は1904~1905年に開催された“II Concerto”誌の作曲コンクール、セレナータの部で1等金牌を受賞した作品で、アマデーの楽曲の中でも名作の一つ。ミヌエットとガヴョットの二つの楽章から構成されており楽譜には作品番号が附されていないが、遺族が作成した手書き譜一覧によるとOp.213となっている。中野二郎氏はあえて前半のミヌエットだけを編曲して、ガヴョットは割愛としている。

## 叙景的幻想曲「秋の夕暮」Fantasia descrittiva “Tramont d’Autunno”, Op.99 (1906)

Giuseppe Manente

I. Il Tramonto (黄昏) II. Ave Maria (アヴェ・マリア) III. Ballo sull’Aia (打樞台上の踊り)

作者は1868年2月カンパニア州のモルコーネに生まれ、1941年5月ローマに逝いたイタリア吹奏楽時代黄金期の中心人物と言える作曲家、指揮者、トランペット奏者。ソレントの楽団長であった父から最初の音楽教育を学びナポリ音楽院に進学、作曲とトランペットを学び、続いてマドリッドの音楽院でも学んだ。卒業後22歳の若さで歩兵60連隊軍楽長に就任、1898年のトリノ万博では800人以上で編成された吹奏楽団を指揮、各地を回った後1918年に陸軍省から任命を受け、音楽隊を率いてニューヨーク、パリ、ロンドン、ブリュッセルと歴訪した。

作品は450曲を超えるものがあり吹奏楽が圧倒的に多く、中でも行進曲は100曲以上を残している。マンドリン楽曲においては「マンドリン芸術」や「メリアの平原にて」等の極めて重要作品や「詩人の瞑想」「桂樹の下に」等ピアノ曲から移した美しい小品も残している。

本作は1906年に開催された“II Plettro”誌の第1回作曲コンクールで銅牌を受賞した作品で、「マンドリン芸術」と並ぶ初期の傑作。元々は吹奏楽曲として作曲されており原題は「叙景的幻想曲」となっている。また本邦においては1920年に早くもO.S.T.で取り上げられており、武井氏によって「秋の夕暮」と訳されている。その後「晩秋」という邦題が広まったが「秋の夕暮」が適切であり、また武井氏に敬意を表す意味で原題通りとした。

## ガヴオット「愛撫」“Caresses” Gavotta (1912)

Girolamo Cali

作者については本作入賞が発表された“*Il Plettro*”誌に「マンドリン演奏の世界では新たな存在だが、楽壇では既に高い評価を受けている」と紹介されており、多くの楽団の指揮者として活躍する一方、ピアノと吹奏楽の為の曲を多く生み出しているとある。作品には4楽章の交響曲や、2幕の歌劇「エーデルワイス」等があり、作品はイタリア各地のコンクールに入賞しているとされる。“*Il Plettro*”誌では1916年、1917年にも作者の作品が掲載されているが、各種の音楽事典やイタリアの様々な文化や人々のライブラリであるTreccani.itにも掲載されていない。

本作は“*Il Plettro*”誌の第4回作曲コンクールのカテゴリーD、四重奏(マンドリン×2、マンドラ、ギター)の為のガヴオット、前奏曲、ミスエット等の部門で一等を受賞した作品である。同誌の作曲コンクールからは多数の名作が生み出されており、この第4回でもS.ファルボの「序曲ニ短調」やA.カッペルレッティの「劇的序曲」、N.ラウダスの「ギリシャ風主題による序楽」などが入賞しており、それらに匹敵する評価を受けた作品と位置づけられるだろう。1924年に武井氏が執筆した「マンドリン・ギター及其オーケストラ」の中にも前述の作品と並んで紹介されている。

## セレナータ「穏やかな夜」“Notte Placida” Serenata (1925)

Giuseppe Anelli

作者は1873年5月にイタリアのクレモナ県トリゴロで生まれ、1923年8月トリノに逝いた作曲家、指揮者、教育者。父よりオルガンを習い、ミラノの音楽院に進みM.サラディノやA.ガリに和声、対位法等を学んだが、16歳にならないうちに父が亡くなり、父の後任として故郷のオルガニストと楽団指揮者に就任しなければならなくなった。1924年からはサルツォ音楽学校の教授となり、後に学長も勤めた。作曲は忙しい活動の合間を縫って行なわれたが、作品にはオペラ「万歳!」「アウローラ」、自身の台本であるオペレッタ「人生波瀾万丈」等を作曲した他、交響曲「我が祖国」「イタリアの復活」等がある。マンドリン楽曲の作曲にあたってはジュゼッペ・トリゴロのペンネームも使い、序曲「イタリアの復活」「イタリアの目覚め」など5つの序曲で、マンドリン合奏におけるシンフォニアの形式の定番様式を残した。

本作はサルツォ音楽学校の教授であった時代の作品で“*Il Mandolino*”誌に発表された小品であるが、平易な技法で書かれているながらも旋律が美しく、短いながら巧みなオーケストレーションはここでも活かされている。親愛なる友人であり同僚であるI.A.フィリオリーニに献呈と記載されている。

## 「くだもの舞曲」Suite “Le Danza dei Frutti” 作品 111 (1948)

武井 守成

No.1. 葡萄のミスエット (Minuetto dell’uva) No.2. 桜んぼのポルカ (Polka della ciliegia) No.3 柘榴のボレロ (Bolero della melograna)  
No.4 苺のパヴァナ (Pavana della fregola) No.5. オレンジのホタ (Jota dell’arancio)

### 作曲者記

「戦争中ギター独奏曲のみを書いていた私が一昨年オーケストラの復活後初めてマンドリンアンサンブルの為に書いた「微風」について昨年夏に作曲。それぞれの果物のよせて其感じを舞曲としてあらわしたもの」

1949年11月6日 オーケストラ・シンフォニカ・タケイ 第49回 復活第一回演奏会

## 樂詩「あやつり」 作品12 (1927) “Fantoche” ポール・ヴェルレーヌの詩に據れる

鈴木 静一

オーケストラ・シンフォニカ「タケキ」會長 武井守成氏に捧ぐ

作者は1901年東京に生まれ、1980年同地に逝いた作曲家、マンドリン奏者。幼少期よりオルガンを嗜み、中学時既に作曲、和声を習得、慶應義塾在学中にA.サルコリの元で声楽家を目指すも師の勧めで断念し、サルコリの薦めでギターやマンドリンの習得を開始すると共に、「やっていた作曲の真似ごとを始め、“峠”などを書いた」ことで作曲の才能を認められ作曲活動を開始した。1922年、東京プレクトラムソサエティの創立に加わり、1927年にO.S.T.が開催したマンドリンオーケストラ曲コンコルソにて“Le Ciel(空)”が二等入選、武井氏により「あまりにも素人臭い」とされながらも「和声、転調、形式、調性、旋法性のすべてに於て曲のもつ情操が此曲を入選せしめた。(抜粋)」と評された。同年東京マンドリン協会を設立し指揮者に就任。翌年にも「北夷」で最高位入選を果たしたが、二年連続で同位を得た堀清隆と比較して武井氏は「鈴木には芸術家としての優れた天分はあるが、音楽家としての実力が足りない。堀は芸術家として優れた天分はないが、鈴木よりも遙かに立派な音楽家である(要約)」と評している。その後、日本ビクターに入社し、映画音楽などに従事し成功を取った。後の大作を連発するのはそれよりもかなり下った1965年以降の事である。

本作は武井守成に献呈されており、1928年にR.M.G.マンドリン・ギター評論第18号に添付楽譜の形式で出版されている。同誌に鈴木は「『空』の姉妹編。演奏に就いては、飽くまで軽く、面し、行進曲調にならぬ程度の速度を保つて戴けば結構です。」と記している。また竹友藻風の訳に依るヴェルレーヌ選集(1921)の「歌垣」から「あやつり」の訳詩が転載されている。

なお、O.S.T.での演奏は16年後の1943年で、武井氏は本作について「純真な意想と効果的な楽器の扱い方とで和声上の欠陥を補い常に魅惑的な作品を提示していた」と記している。

## 幻想曲「ハンガリアの旅」 (1965) “A Travers la Hongrie” Fantaisie François Menichetti

作者は1894年コルシカ島のヴィアレージョに生まれ、1969年ローマに逝いたフランスの作曲家、指揮者。François Detogaのペンネームも用いた。アコーディオン製造を生業とした父から音楽を学び、20歳になるまで独学で音楽を勉強しつつ島内のバスティアの吹奏楽団にコルネット奏者として入団した。その後高度な音楽教育を受ける為、トゥーロン音楽院のボノ教授の指導を受け、一等水兵として海軍に入り、軍楽隊に入隊した。第一次大戦後は軍楽隊の副指揮者に任ぜられ、赴任した各地の連隊で軍楽隊のために、それぞれの土地の楽器を用いてエキゾチックな多くの作品を発表・録音しながら、同時にパリ音楽院ではフーガと対位法を学んだ。

第二次世界大戦開戦時には第80連隊に所属しドイツ国境に近い要衝メスにいたところを急襲され捕虜となるが、収容中でも彼は創作を続け、その陰惨な思い出が後に「最後の宿营地(La dernière étape)」「呪われた谷(La vallée maudite)」などに反映された。

戦後除隊、民間人の生活に戻って、長年の友人だったマリオ・マチョッキの事業を継続するために、彼は積極的にプレクトラム音楽に関わるようになり、1948年7月マンドリンオーケストラのための“Le Mediator(ル・メジャートル)”誌を創刊した。同時に録音をLPで発売するなど、今日でいうところのメディアミックス的な活動で大いに人気を博した。父の職業や当時の流行を反映してか、多くの作品はマンドリン合奏の他、アコーディオン合奏でも演奏出来るように書かれている。

本作は彼が後半生をかけた“Le Mediator”(ル・メジャートル)誌の1964年第24号に掲載された。親友の作曲家ルクトフ・ワッセナールの追悼と添えられ、上記のようにアコーディオン合奏も選択できる。出版時は四重奏であるが、チェロ、バス、打楽器、ピアノのパート譜で別売された。解説には「この音楽は、時に陽気で時にノスタルジックで、私たちのプレクトラム・オーケストラのために特別に書かれたもの。『モスクワ』(Mediator No.11)と同じ成功を収めることを期待している。その完全な効果を得るためには、示された揺れやニュアンスをよく観察してほしい。」と追記されている。

作者については唯一“Mandolinismo”誌に作曲コンクールの入賞者として肖像写真が掲載されている以外の情報がない。作品も本作以外には前述のコンクール入賞曲の1点しか確認されていない。

本作は1922年“L’Estudiantina”誌で発表された作品でマンドリン作品には珍しいパソ・ドブレという形式で書かれている。パソ・ドブレは一般的には闘牛祭や大衆行事で演奏される速いテンポの2/4拍子の舞曲。楽譜には「我が子セザールとルイーザ」へと書かれている。

この作品についてはおそらく中野二郎氏が「東京ラプソディ」と旋律8小節2箇所が酷似している事を公にして有名?になったと思われる。しかし実は最初の酷似しているといわれる主旋律部分はオーストリアのフェルディナンド・ブライスが書いた愛国的な行進曲である“O du mein Österreich”の中間部とよく似た旋律であり、更にその曲の楽譜には「F.V.スッペの歌曲より」と記されており、1849年に書かれた寓話劇「アルラウンル」中のアリア“Das ist Österreich”(原曲は3/4)から採られている事がわかる。そして更にこれは中世の吟遊詩人が書いた旋律が題材という説すらある。ちなみにスッペのこの寓話劇は、このアリアの途中で盛大なブーイングを受け、初演の途中で打ち切りとなっている。今回の演奏は帰山栄治氏が東京ラプソディと同じDmに編曲したものを元として、原調のAmに戻して演奏する。

## 「静寂」(1905) “Quies”, Op.137

Giovanno Bolzoni / Giovanni Francesco Poli

作者は1841年イタリア、パルマに生まれ、1919年トリノで逝いた作曲家で指揮者。パルマの王立音楽院で和声を学んだ。1866-67年にはA.ボンキエリと共にクレモナ市立劇場でオペラを指揮、以降各地の音楽院や歌劇場で指揮者・指導者を歴任した後、1887年にはトリノのG.ヴェルディ音楽院の院長に就任し、後世はトリノで過ごした。作曲家としての代表作は多くの管弦楽作品で「劇的組曲」「ロマン的組曲」「牧歌的組曲」の三部作、大管弦楽の為の「海の牧歌」や6つの演奏会用序曲、4幕のメロドラマ「アルプスの星」などがある。マンドリン作品としては牧歌的組曲「田園の旅」と「マンドリンオーケストラと管弦楽の為の組曲」などがある。

斯界では多くの合奏、作曲コンクールの審査員を務めたが、自作の編曲にあたっては友人の編曲家G.F.ポーリに全面的な信頼を置いており、これは1906年の合奏コンクールでポーリ率いるクレモナのCircolo Mandolinisti e Mandolinisteの演奏に感嘆した為と考えられる。G.F.ポーリは所謂ディレッタントであり、1867年に生まれ、1927年にクレモナで没している。P.カエターニの門下生で1895年にA.カヴァッリと共に製材所“Cavalli & Poli”社を設立し、楽器製造も行った。

本作は石村隆行氏が在伊中にテルコロ・ディ・クレモナの蔵譜を譲受けられた中に含まれていたもの。1921年にポーリによって編曲されている。作者は弦楽合奏曲を多く残しているが滋味深い作品が多く、本曲もそうしたうちのひとつ。各パートが重なりあって旋律が構成される様が大変で荘厳で浪漫的である。

## 序曲「芸術と労働」(1930) “Arte e Lavoro”

Ignazio Bitelli

作者については180曲以上のマンドリン合奏作品を残しているが、生年が判然とせず没年はわかっているもののその生涯については殆どわかっていない。1940年、41年にシエナで開かれたO.N.D.(Opera Nazionale del Dopolavoro,ファシスト党が組織した、労働後の余暇活動を支援するための地方委員会として作られた組織)の作曲コンクールでメヌエット「中世の城」と「太鼓手の巡邏」が入賞した事がわかっている程度しか情報がない。作品の殆どは“II Mandolino”と“II Concerto”に掲載されている

本作は1930年“Mandolinismo”誌199号で発表された曲で、正統的な序曲のスタイルを持った端正な作品。同一の作品が1923年に同誌で“II Kremlino”という題名で発表されている。短期間にタイトルを変更して出し直すというのはあまり考えられないが、当初は荘厳な「クレムリン宮殿」の姿を描いたのかもしれない、時代的にはレーニンが1924年に死んで、スターリンが政権を握り、ソ連は資本主義と一線を画す体制をとっていった事が何か影を落としかもしれない。一方で「芸術と労働」といういかにもファシスト党やO.N.D.が好みそうなタイトルに変更して発表しなおしたという点にも何かしらの意図があったように感じられる。

## 「神秘」(1931) “Mistica”

Arrigo Cappelletti

作者は1877年イタリア、コモに生まれ、1946年同地に逝いた作曲家。同地の音学院で現在もコンクールにその名を残すE.ポッツォーロにピアノ、オルガン、対位法といった基礎を学び、ボローニャではC.D.オリオから作曲法を、ミラノのG.ヴェルディ音楽院では吹奏楽とオルガン、合唱といった課程で次々とディプロマを獲得した。経歴からも推測できるように多様なジャンルに作品があるが、特にオルガン作品を得意とし、コモのフェデーレ教会のオルガニストにもなり、各地のオルガン曲コンクールでも度々入賞したという。また宗教音楽のジャンルにも優れた作品を残しており、殊に対位法を駆使したその作曲技法には自信を持っていたと思われる。作品はオルガン曲が最も多く、次いでピアノ曲、声楽曲、管弦楽曲等がある。マンドリン作品は「劇的序曲」、マンドリン讃歌「フローラ」がよく知られているが、実際には作編曲併せ9曲しかない。いずれも構成的な作品で銘品揃いである。

本作は1931年に“II Plettro”誌で発表され、創刊25周年にあたり主幹のA.ヴィッツァーリに献呈された格調高い作品。少ない音かつシンプルな展開を為して透明感が高く、一つの主題を彩りを変えながら展開するオーケストレーションの妙は筆舌に尽くしがたい。また精神的な密度が非常に高く、書かれた楽譜から読み取れる情報量は極端に多い。

## 「スペイン幻想曲」(1906) “Fantasia Spagnola”

Ezio Redeghieri

作者について詳しい経歴は殆どわかっておらず、“II Plettro”誌1913年第24号に本曲が肖像画と共に掲載された際に、ブリュッセルの作曲家と書かれているが、詳細については判明しているのは、スイス南部のティチノ州ロカルノ生まれで後にブリュッセルに移住した事くらいである。作品の中で最も著名と考えられるのは1910年、トリノで“Lo Spettacolo”紙が主催したオペレッタの作曲コンクールにおいて、A.アマデー、S.ファルボに次ぐ第3位に入賞している事があげられる。本コンクールはG.ドロヴェッティ「王女の物語」の台本に対して作曲するという興味深いものであった。マンドリン作品は本作を含めて7曲しか判明していない。

本作は1906年の“II Plettro”誌第1回作曲コンクールにおいて第2項銀牌を受賞した作品で、同コンクールの受賞曲の中でも一際異彩を放つもの。長らく本邦では演奏されてこなかったと考えられてきたが、今般「武井音楽文庫」の中から“II Plettro”の総譜原本と、1929年6月付の手写パート譜が見つかった(ちなみに1mパートは九島勝太郎が書いている)。総譜は演奏に繰返し使用したと考えられる厚紙の補強があり、指揮棒で叩いたと思わしき痕跡がある。1924年に武井氏が上辞した「マンドリン・ギター及其オーケストラ」には既に本作が掲載されており、当時“II Plettro”の作曲コンクールの上位入賞者として認知されていたと思われる。タケイの演奏会記録には本作の名は無いが、共益商社を通じて楽譜が流通していた事から、往時既に演奏されていたと考えるのが自然だろう。今回は石村隆行氏が整曲した楽譜を使用する。

## 「ミシン」 作品72の4 (1947) 武井直子氏に贈る

武井 守成

作曲者記

「『ミシン』はギター独奏曲『少女を書きたる』の第四曲で前(間奏曲を指す)と同様の編成に移した。此合奏ではギター独奏の幽遠さは失われ、凡音性は生硬に傾くが、ギターそれ自体の持っていない金属的な機械の音の表現に別の力が生まれている。ミシンの回転と糸巻の踊る状を写したものの、内容に於て原曲とは多少変えた箇所がある。」

1943年12月19日 オーケストラ・シンフォニカ・タケイ 第48回 定期演奏会

本演奏会は、武井さんが愛したご息女の直子さんの為に書かれたこのささやかな作品を、お二人に捧げて終演といたします。

# Membre di Concerti della Ensemble

## プレクトラム・ソサエティ

2005年にオリジナル曲を中心に合奏しようという趣旨のもとに集い結成したマンドリン、ギター弦楽室内楽団です。月例会を通年開催し、音楽会を毎年4月に開催しています。自称プレソと呼んでいますが、プレソのソはもちろんソサエティのソですが、元素のソでもいいし、元祖のソ、あるいは蘇生のソでもいいのかもしれませんが。合奏の素になるものにオリジナリティを見い出すべく、今回の演奏会のように珍しい作品を掘り起こしてみたり、弾き尽くされた作品にはなにか新しい光を当ててみたり、さらには、響きそのものにとことんこだわって、この合奏形態の可能性を広げてみようということにも取り組んでまいりました。

- ・Mandolini Primi : 石川理子、大崎和彦、加藤粧知子、田中毅、増田朱音
- ・Mandolini Secondi : 須藤純子、田島泰子、森真理、山崎雅子
- ・Mandole Tenori : 石澤聡美、石橋一彦、植木高、北川輝彦
- ・Mandoloncelli : 小川真寿美、作田真樹
- ・Chittare : 石田礼子、石田渉、都筑文子、肥田栄治
- ・Contrabass : 箕田文夫
- ・Direttore : 小穴雄一

## 浦和ギターマンドリンクラブ

浦和ギターマンドリンクラブは、昭和54年7月に旧浦和市で誕生、今年で45年目を迎えます。当初は10数名であった部員も年々増え、現在では、職業・年令・出身もバラエティに富んだ総勢約80名となっています。設立当初より、部員の話し合いによる運営・音楽作りを基本としています。練習は毎週土曜日夜、浦和の公民館を中心に行っており、その総決算として毎年6-7月に定期演奏会を開催しています。地元の皆様に愛され、近年は千人を超えるお客様がお越しくださる規模に成長しました。

本日の演奏会には、クラブを代表して自称精鋭30名が参加します。イタリアオリジナル曲、武井守成氏の曲と同氏にちなんだ曲を、浦和らしい楽しく心を込めた演奏でお届けしたいと思います。

- ・1st Mandolin : 中尾美鈴、山田美樹、岩井律子、畠山美奈、外尾未恵、宮石幹子
- ・2nd Mandolin : 相馬元、行川純子、穴水美貴子、川村英夫、東佳穂、横山隆二
- ・Mandola : 亀沢忍、葛西しのぶ、大橋久美子、北川輝彦、佐藤由美子、新保由里
- ・Mandoloncello : 江本郁子、小林千恵子、嶋岡正充、宮地秀命、山中健史
- ・Guitar : 野口勇、片山幹久、大村慎一、佐々木真澄、西田佳枝、梅崎敦子
- ・Director : 久保光司

## コンソルテ

コンソルテは毎年のこの演奏会の為に集まっている合奏団です。普段は東京、埼玉、神奈川、静岡、大阪でそれぞれの活動を行いながら、年に一度の演奏会に向けて社会人、大学生が集っています。

今回はトリのステージという事で、20数曲の中から選曲会議を経て、非常に起伏に富んだ曲想が異なるものを並べましたが、スペインで始まり、スペインでべて、武井さんの滋味深い作品をbisに置くという凝ったプログラムとなっています。

- ・Mandolini Primi : 森中恒一郎、濱田佳穂、堀地圭子、八重樫大地
- ・Mandolini Secondi : 横澤有里子、嶋田惇、中島淑乃、西井奈那
- ・Mandole Tenori : 石井翠、小川弘晋、増田朱音、山本麻菜
- ・Mandoloncelli : 加藤智恵、石川美砂、井上亮、根本崇
- ・Chittare : 清田和明、大村慎一、樋口優一、肥田栄治、宮崎純一
- ・Mandolone : 徳能総彦
- ・Contrabass : 大石彰
- ・Direttore : 井上亮/横澤恒